

生物相を本格調査へ

白神山地 遺産登録30周年機に弘大

白神山地が12月に世界自然遺産登録30周年を迎えるのを機に、弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センターは今春、白神山地の生物相の総合調査に乗り出す。生物多様性の調査は1993年の登録前後に国や県などが行って以来、新たに組織立った調査は行われていないという。総合調査は植物や昆虫など各分野に精通した地元の市民団体らの協力を得て、1年かけて集中的に行う計画。センター長の中村剛之教授(55)は「白神山地の今を記録し、将来の自然保護・保全に役立つ比較可能なデータを収集したい」と意気込む。(石田紅子)



総合調査に乗り出す中村教授(後列右ら) 弘前大白神自然環境研究センターのメンバー

自然保護へデータ収集

弘大は白神山地を1年で調査するには無理があるため、重点調査地として鱒ヶ道町にある「白神の森遊ヶ道」を主に調査する。遊ヶ道は過度に観光地化されておらず、白神山地核心部同様の森林景観を保っているためだ。調査項目は維管束植物・昆虫・キノコなど。今ある生物相を記録し、リスト化に努める。

重点調査地のほかに、分野によって他の地域を調査することも自由とする。候補地として弘前大白神自然観察園がある西目屋村川原平、秋田県藤里町岳岱や、特殊環境として深浦町行合崎、秋田県大館市志谷地湿原を挙げた。

ほかに2023年の環境を記録する目的で環境写真の撮影も行う。場所と撮影日時が特定できる写真を集め、将来的に同じ時期、画角で定点撮影し、比較できるようにする。

調査は4月1日以降、雪解けの状況を見ながら各分野グループで始め、降雪を考慮して年内に終える計画。調査結果は同センターが取りまとめ、23年度内に出版する予定だ。

11日時点で調査への協力を予定するのは白神山地ビジターセンター、津軽植物の会、津軽昆虫同好会、白神キノコの会、弘前大フィールドサイエンス研究会の会員ら約40人。調査員はポ

ランティアと成り謝礼はないが、調査活動に必要なクマよけスプレーや腕章は事務局の同センターが配布する。調査への協力を希望する人は随時受け入れており、各分野のグループにも紹介するという。

現在、調査グループの組織化、調査員名簿の作成、リーダーの選任を進めており、4月の早期に名簿を確定させたい考え。同月中旬にリーダーらを集めて初会合を開き、本格始動させる。その後は集会を2カ月に1度程度開き、情報交換や調査状況の確認を行っていく。

中村教授は「本当は登録20年の節目にできていたら良かったが、センターが開設して間もなく手が回らなかった」とし、「白神山地のこれからの変化を見据え、5年後、10年後に役立つ調査にしたい。自然に関心がある人が協力してくれることで良いデータが取れるのでは」と期待を込める。

上記の画像は、当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。